

JAPAN RESEARCH JOURNAL OF RUGBY FORUM

No. 17 (Supplement) March 2024

ラグビーフォーラム

令和 6 年 3 月

日本ラグビー学会

Japan Society of Rugby

日本ラグビー学会第 17 回大会

令和 6 年 3 月 23 日（土）

会場：関西大学堺キャンパス（A 棟 2 階）

〒564-8680 大阪府堺市堺区香ヶ丘町 1-11-1

南海高野線「浅香山」駅下車、徒歩約 1 分

目 次

1. 大会スケジュール	3
2. 大会案内	4
3. 発表案内	6
4. シンポジウム	7
5. 一般発表タイムスケジュール（口頭）抄録	9

1. 大会スケジュール

一般発表（口頭） 10:30～12:00

SA202 教室

総会 13:00～13:30

SA202 教室

シンポジウム 14:00～15:30

SA202 教室

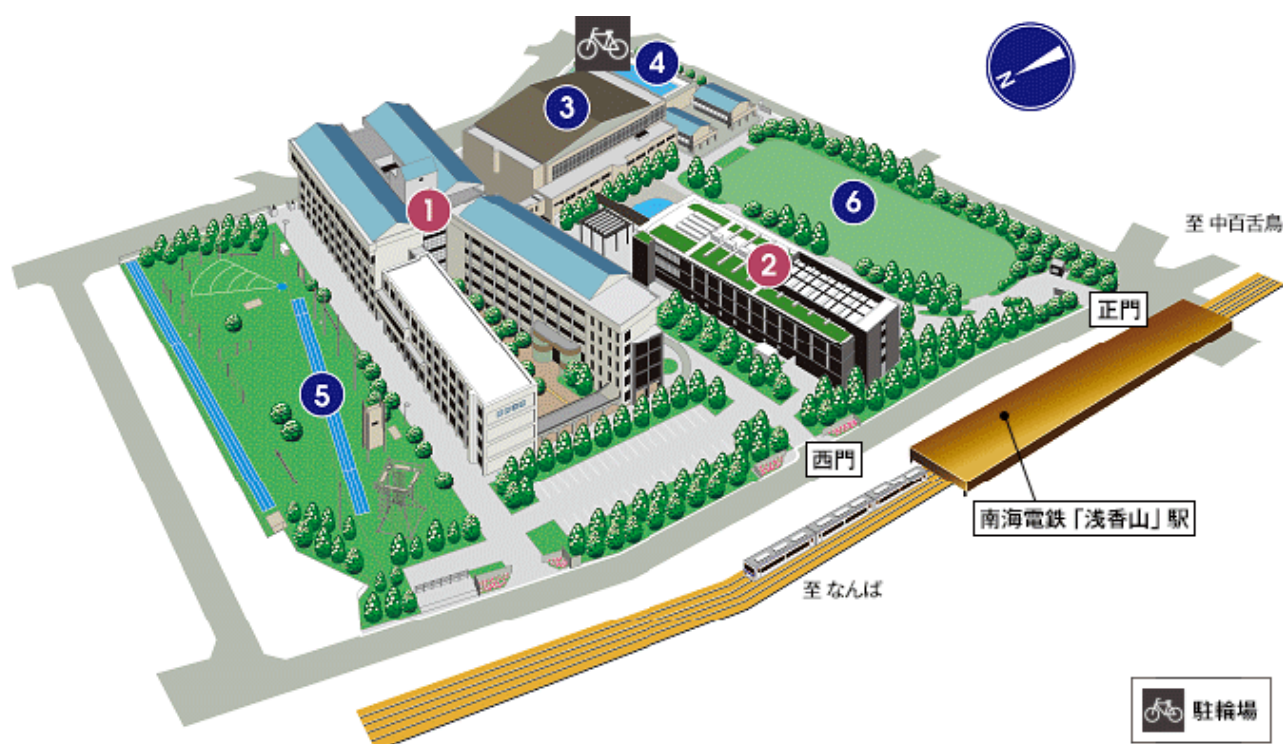
意見交換会 16:30～18:30

B 棟 1 階：カフェテリア

2. 大会案内

a. 会場

- ・ 関西大学堺キャンパス（南海高野線「浅香山」駅下車、徒歩約1分）
A棟2階（SA202～SA204 教室）



- ① A棟（教室、堺キャンパス事務室、キャリアセンター）
- ② B棟（教室、堺キャンパス図書館、カフェテリア、購買店）
- ③ 体育館（アリーナ、格技・実習教室、トレーニングルーム）
- ④ プール
- ⑤ 体験学習エリア
- ⑥ Evergreen（広場）

b. 受 付

- ・総合受付場所：SA204 教室
総合受付時間：10:30－14:00
一般発表受付：10:30－11:00
- ・大会参加費等
会 員 1,000 円
学 生 無 料
一 般 無 料
- ・必ず受付で入場手続きを行ってください。
- ・学会入会手続きも、総合受付で行っております。

c. 休憩と食事

- ・休憩所：SA203 教室
- ・昼食は、会場周辺の飲食店やコンビニエンスストアに限りがあるので、できるだけご持参ください。

d. 諸注意事項

- ・学内では係員の指示に従ってください。
- ・会場内での携帯電話等の使用を禁じます。
- ・喫煙は所定の喫煙所にてお願いします。
- ・貴重品はお預かりしません。手荷物の管理は各自でお願いします。
- ・大会事務局では盗難や事故について一切の責任を負うことはできません。各自でご注意ください。

e. 大会実行委員会

大会長 石指宏通（奈良県立医科大学）
委員長 灘英世（関西大学）
副委員長 吉矢晋一（西宮回生病院）
委員 青木敦英（芦屋大学）、入江直樹（滋賀大学）、岡本昌也（愛知工業大学）、川端泰三（関西大学）、北畑幸二（有限会社北畑産業）、高木應光（神戸外国人居留地研究会）、森仁志（関西大学）、山田光昭（大阪公立大学）

当日の連絡先：学会大会事務局 携帯 090-5094-4470（ 灘 ）

3. 発表案内

a. 発表方法

- ・発表は口頭で行います。

b. 進行

- ・発表者は各セッションとも座長の司会によって進行します。座長の指示を遵守してください。

c. 発表時間

- ・発表時間「10分」・討論「5分」の合計「15分」です。
ただし、フロアーから活発な質問等のある場合には、座長の裁量で討論時間の調整を行ってください。時間厳守をお願いします。

d. 資料配布

- ・資料を配布される方は、各自で準備し、大会当日に持参のうえ、発表受付担当者に提出してください。50部を準備してください。

e. 機器使用

- ・PCはこちらで用意します。発表データを「30分」前までにUSB等でお持ちください。

f. 発表取消

- ・プログラムに掲載されている発表者が、不測の事情によって欠席せざるをえない事情の生じた場合には、大会事務局にできるだけ早くご連絡ください。連名発表の場合には、連名者が、大会本部の承認を得て発表を代行することができます。

g. 座長要領

- ・座長は、各発表会場受付で、受付を行ってください。座長は開始「20分」前までに必ず受付を済ませてください。座長は、フロアーからの質疑等を促し、研究発表の円滑な運営が進行するようにご協力をお願いします。

4. シンポジウム

14:00～SA202 教室

「高校ラグビーの課題と展望」

2015 年ラグビーワールドカップ以降、日本ラグビーは日本代表の活躍もあり、かつての人気を取り戻しつつある。その影響もあって、ラグビースクールに入団する子どもが増加しているという情報もラグビー界にとっては喜ばしい話題である。しかし一方で、高校ラグビーは各県の強豪校に部員が集中する傾向が強くなり、特に私立の強豪校では合宿所も完備され、全国各地から入部を希望する生徒が多数詰めかける。その為、都道府県によっては高校ラグビー部の登録数が激減するという二極化現象が進んでいる。その結果、県大会の予選 1 回戦が決勝戦となる、あるいは予選が行われない地域も出てきた。このような流れの中で、第 103 回全国高校ラグビー大会は今後の日本ラグビーの将来を左右する大会になったと言っても過言ではない。103 回の歴史の中で初めて「合同チーム」が花園の舞台に立った。高校生にラグビーをやらせたいという関係者の英断であり、試合のできない高校ラグーマンにとっての希望の光になったことは言うまでもないが、高校ラグビーが抱えている部員不足の根本的な解決策となったとは言えない。

今回のシンポジウムでは、高校ラグビーに焦点を当てて、部員不足という問題を抱えながら現場で奮起する指導者の立場、その努力を支える高体連役員の立場からご意見を頂戴し、新たな改革について模索しながら、高校ラグビーの未来を考える。

進行司会：村上晃一 氏（ラグビージャーナリスト）

【プロフィール】

1965 年京都市生まれ、京都府立鴨沂高校を経て大阪体育大学。ラグビー部現役時代はセンター、フルバックとして活躍 1986 年度、西日本学生代表として東西対抗に出場。

1987 年 4 月ベースボールマガジン社入社、ラグビーマガジン編集部勤務、1990 年から同誌編集長、98 年退社後はフリーランスの編集者、記者、ラグビージャーナリストとして活動をはじめ、JSPORTS のラグビー解説も 1998 年より継続中で 1990 年から 2019 年の 6 回のラグビーワールドカップでコメンテーターを務める。

著書に「仲間を信じて」（岩波ジュニア新書）、「ハルのゆく道」（道友社）、「ラグビーが教えてくれたこと」「ノーサイド勝敗の先にあるもの」（あかね書房）など多数出版されている。

シンポジスト：プロフィール

吉瀬 晋太郎 先生（福岡県立浮羽究真館高校ラグビー部監督）

1985 年、福岡県浮羽町生まれ。父親たちが創設した地域の子供ラグビーチーム「浮羽ヤングラガーズ」に小学校 3 年生で入部。浮羽高校ラグビー部に入部、3 年生の時に福岡県ベスト 8。京都産業大学ラグビー部に入部、3 年生の時に関西大学 A リーグでプレー、全国大学選手権大会ベスト 4 メンバー。住友林業株式会社を経て、体育科教員免許を取得。京都産業大学フルタイムコーチ（関西大学 A リーグ 7 位）を務めたのち、2015 年から福岡県立浮羽究真館高等学校ラグビー部監督。2016 年からは ALL 福岡コーチにも着任。JRFU コーチ資格 A 級コーチ資格取得。日本体育協会公認スポーツ指導者資格取得。B 級レフリー（九州協会）公認資格取得。

清鶴 敏也 先生（同志社香里高等学校ラグビー部監督）

1984 年同志社大学卒 現役時代は SH として活躍し、同志社大学 3 連覇の原動力となる。1984 年に同志社香里高校の社会科教員として赴任し、同校ラグビー部コーチ、監督を務める。全国高校ラグビー大会に 4 度出場、最高成績は 4 強。1996、1997 年高校日本代表監督としてスコットランド、フランスに遠征。これまでに大阪府高体連ラグビー専門部委員長、近畿高体連ラグビー専門部委員長を歴任し、現在は全国高校ラグビー大会シード委員長を務めている。

高木 智 先生（香川県立高松北高校ラグビー部監督）

1966 年、兵庫県尼崎市生まれ。尼崎北高校入学後、友人から誘われてラグビー部に入部。大阪体育大学 3 回生時に FL のリザーブとして大学選手権ベスト 4 進出。大学 4 回生で主将を務める。平成元年香川県立高松北高校に赴任しラグビー同好会設立。平成 2 年 4 月にラグビー部に昇格し新人大会優勝。平成 5 年第 73 回全国高校ラグビー大会初出場。15 回目出場の令和 6 年第 103 回全国高校ラグビー大会 1 回戦で倉吉東と対戦して 48-3 で花園初勝利。香川県ラグビー協会理事、コーチ委員長、高校委員長、香川県高体連ラグビー専門部委員長、四国高体連ラグビー専門部委員長を歴任。日本ラグビー協会 A 級コーチ、日本スポーツ協会ラグビーコーチ 3

藤原 幹治 先生（敦賀工業高校ラグビー部監督）

1970 年 9 月 25 日生まれ、1989 年 3 月 神戸高校卒 1994 年 3 月 京都教育大学卒
小中学時代は野球、高校からラグビーを始める。
ポジションは高校センター、大学スタンドオフ
1995 年～96 年 兵庫県立川西明峰高等学校ラグビー部監督（2 年間）
2007 年～現在 福井県立敦賀工業高等学校ラグビー部監督（17 年間）
現在、福井県ラグビーフットボール協会理事 コーチ委員長

5. 一般発表(口頭)抄録

会場(SA202)・タイムテーブル

座 長 寺田 泰人 高津 浩彰	
10:30	ラグビー日本代表ヘッドコーチの役割に関する研究 高岡 慎一郎（甲南大学ビジネスイノベーション研究所）
10:50	フランスラグビーの真の心臓部がここにある —現代フランスラグビー発展の文化地理学的研究— 山碕 敦司（ラグビー人類学研究談話会）
休憩：10 分	
座 長 青木 敦英 入江 直樹	
11:20	スポーツ・ライフ・バランスについて —大学ラグビー選手のスポーツと生活の調和— 高田 正義（愛知学院大学）他 4 名
11:40	運動部の不祥事に対する連帯責任について 高田 正義（愛知学院大学）他 4 名

ラグビー日本代表ヘッドコーチの役割に関する研究

高岡慎一郎（甲南大学ビジネスイノベーション研究所）

【キーワード】 日本代表 ヘッドコーチ 役割 経営者

1. 本研究の目的

2007年にカーワン(John Kirwan)がヘッドコーチに就任して以降、日本代表は着実に力をつけ、常に世界ランキング10位以内を窺う水準のチームとなった。本研究の目的は、この間のヘッドコーチの役割について、経営者との比較を通じて理解を深めることである。

2. 先行研究

ヘッドコーチと経営者では、大きな権限や結果責任、限られたリソースでの運営などの観点で役割に関する類似点が見受けられる。それゆえ、経営者の役割に関する先行研究を検討した結果、「ビジョンの発信」「業務管理」「人間関係構築」「人材育成」の4つが抽出された。

3. 調査対象と分析方法

調査対象は、ラグビー日本代表のヘッドコーチを務めたカーワン(John Kirwan)、ジョーンズ(Eddie Jones)、ジョセフ(Jamie Joseph)の3名であり、データは一般情報を二次分析しているものである。手法としては、質的分析方法を参考に分析を行った。

4. 分析結果

調査対象の3人のデータを分析する中で、共通に行っている役割として浮かび上がったのは「明確なゴール設定とマインドセット」「チームワーク強化」「徹底的なトレーニング」「ダイバーシティマネジメント」の4点であった。

5. 考察

先行研究と分析結果の比較を行ったところ、先行研究における「ビジョンの発信」「人間関係構築」「人材開発」と、分析結果の「明確なゴール設定とマインドセット」「チームワーク強化」「徹底的なトレーニング」はそれぞれ類似しており、これらは、いずれも共通に、組織のリーダーとして重要な役割であると考えられる。一方で、「業績管理」は先行研究にのみ見られた

が、これはマネジメント全般はGM職が担う体制であることに起因すると想定される。また、「ダイバーシティマネジメント」は分析結果にのみ見られる役割であるが、日本代表が多様性に富んだ組織であることから現れていると言えよう。

先行研究 (経営者)	分析結果 (ヘッドコーチ)	考察
ビジョンの 発信	明確なゴール設定と マインドセット	類似した役割
人間関係構築	チームワーク強化	
人材開発	徹底的なトレーニング	
業績管理	-	ヘッドコーチとGM との役割分担が背景と 考えられる。
-	ダイバーシティ マネジメント	メンバー構成の多 様性背景と考えら れる。

また、ジョーンズとジョセフは、いずれも①チームのマインドセット、②各選手のパフォーマンス向上を目的に、メンタルコーチを招聘している。これは分析結果における、マインドセットや育成といったヘッドコーチの役割を補強する意図によるものであると考えられる。

6. まとめ

本研究は組織のリーダーの役割に関して、独自の側面から考察を行ったものであり、この結果を他分野の様々な組織におけるリーダーの研究への援用や、研究の新領域の開拓などに活用されることが期待される。

一方で、サンプル数が少ないこと、一般情報によるものであること、質的な探索的調査となっていることには改善の余地があるため、今後の課題としたい。

以上



フランスラグビーの真の心臓部がここにある

～現代フランスラグビー発展の文化地理学的探究～

山崎敦司 ※



現代フランスのスポーツ文化においてひとときわ異彩を放つ同国ラグビーの風土を研究し、文化人類学的・文化地理学的なアプローチによって**観察・追跡・分析に挑むことは、わが国ラグビーの未来的総合的発展のために大いなる刺激を与えるものと実感している。**

この取り組みは、長年、英語圏のラグビー強国文化(理念・思考・行動様式・コーチング・プレススタイル・戦法とそれらの有形・無形の産物のすべてを、最善のお手本として依拠・没頭し、一途に突き進んでしまった わが国ラグビー社会と選手生活の様々な側面に新鮮な示唆を与えるものと確信する。

特に歐洲ワールドカップを2027年に、米國ワールドカップを2031年に控える中で「ライプ・フン」に肉薄できる新たなラグビー国として認められたわが国にとってはフランスラグビーの研究から新しいエッセンス(ESPRIT)を学び取り、立体的な情報提供、ビジネスシステムの進化、合理的な競技力強化を進めることが重要な課題のひとつであるとも考える。

日本人の強いスピリッツと、英語圏上位国のすばらしい実績と経緯値に加えて、フランスラグビーの風土＝「熱い魂とラグビー愛」を感じ取ることができれば【魂に金棒】であろう。

他分野の研究のありさまや実績に学びつつも、この種の調査・観察・研究活動は、数値によって語りつくすことが困難で、かつ短期間で容易に考察を展開できるものではない。

今次の【フランスラグビーの文化地理を軸とする研究】は、今後を長い目で見れば、本来は壮大な中期構想を建立して むしろフランス国内のラグビー活動の当事者たち、またその研究者たち(民族性研究・社会心理学・文化人類学など)とともに、彼らのたすけを得て徐々に基盤を作り上げてゆくべきものであらう。

本研究に着手するにあたり、同じフランス共和国内にあっても、独自の民族性(と)バリエーションを放ち続ける【南西フランスエリア】が、独立精神と自治志向旺盛にして、中央政府による様々な統括・規制や行政の取り組みとは常に一定の距離を置きながら、スポーツ愛好の文化伝統と生活風土を守り、旺盛な生命力を秘め、ユニークで創造力豊かなラグビーのプレー特質に独特の磨きをかけ続けてきたことに大いに注目したいと感じた。

この【南西フランスエリア】は、単なる「ラグビー好きを地カ」として好奇心をもって観察する対象ではなく【フランスラグビー繁栄の源泉 □ 真の心臓部】と見て観察すべきである。我々は今回、この南西フランス地方がフランスラグビーの歴史、そして進化と発展を力強くけん引し続け、その独自性と力量を誇示してきたことに特に着目した。

当然のことながら、この【南西フランスのラグビー心臓部】は同エリアに110年以上前にラグビーが浸透した結果、現況フロアとアヤを問わず大活躍を見せるフランスラグビー全体においても極めて貴重な刺激を与え続けてきたのであり、ヨーロッパとフランスラグビー文化の発達史の中でも、特別の地位を与えられるべきものである。

例えば、同地域では毎年のように力自働のプロトタイプチームの地位が目まぐるしく入れ替わっており、それら有カチームからたくましく若い代表選手たちが奇跡のように出現し、ラストマッチで所収しと大活躍する。そのかたわらで、この南西地方圏の各都市においては、依然アマチュア軍団の選手数は増え続け、ラグビーを心から楽しんでいるのである。

このSUD-OUEST (南西フランス地域)と通称される地域圏こそ、真のフランスラグビーの心臓部であり、中央共和政府(パリ)と北半分の地域圏とは異なり、独自の歴史と文化(思考・行動の様式とその有形・無形のすべての産物)をベースに発達し、進化を続け、フランスラグビー全体に最適な刺激を与え続けてきた。

なかでも、Occitanie(オクシタニ)地方、そしてNouvelle-Aquitaine (ヌヴェル・アキテーヌ)地方においては、ラグビーが全市長の人気と支持を獲得し、最近50年間で建設された大いなるラグビー王国であるという**事実**に興味を強くそそられると同時に、客観的・批判的なアプローチ(接近・観察・分析)によってその文化風土の神髄を明確にすべきであると感じた。

実は2023年地元開催のフランスワールドカップの指導陣と代表選手はこの地域の出身者が多かった。・ いったい何が、この南西フランスのラグビーを奮い立たせてきたのであろうか。

さらにこれらの盛況を取り巻き、その状況を一層意欲的に盛り上げてきた「クラブ」「企業」「地域社会のフアン」「家族」、そして「同志たちの複合的な集合体としての【ラグビー風土】こそ、今後のフランスラグビーの深い文化研究、そして同時に「日本ラグビーのビジネスモデル」[将来のラグビー社会のさらなる成熟]のための真寶な学び取りに欠かせない要件のひとつである。

フランスのラグビー、またこの南西フランスの地域社会のラグビー自体が、貴重な文化遺産であることをとらえなおし、その真髓としてのエスプリ ESPRITを再び学びなおし、その心臓部の持っている魅力＝ゆるぎない【魂】が、国家・思想・宗教・性別を越えた市民生活の【生きがい】【誇り】【熱意】【愛情】であることを、総会ご出席の諸先生方とともに実感してみたいと願っている。

※ 筑波大学 体育専門学群 第一期生(1978卒)

※ オクシタニ地域圏 AS Beziers Hérault クラブ(現D2ユニーク)元研修員(1995)

※ ラグビー人類学研究談話会 主宰

神奈川県相模原市中央区東淵野辺在住

運動部の不祥事に対する連帯責任について

高田正義（愛知学院大学）、岡本昌也（愛知工業大学）、寺田泰人（桜花学園大学）、
早坂一成（名古屋学院大学）、高津浩彰（豊田工業高等専門学校）

キーワード：連帯責任、同志集団モデル、社会的絆理論、KJ 法

【目的】

運動部員の一部が不祥事を起こすと、反射的に連帯責任を科す風潮が散見される。一方で、連帯責任は理不尽であり、旧態依然の日本独特の文化であるという批評も耳にする。最近、盛んに吹聴される企業の「社会的責任」や「コンプライアンス」の問題とは異なる問題なのだろうか。「同様の目的や見解を共有し、互いに同志として認識している集団」を、同志集団モデル（the like-minded group model）に該当する集団として考えることができる（Miller,2007）。このモデルを手掛かりにすることで、連帯責任を考察することは有効であると考えられる。本研究では、大学運動部の不祥事に対する連帯責任について考察することを目的とする。

【手続き】

対 象 者：大学生 25 名を対象に自由記述アンケートを実施した。

調 査 内 容：「運動部の不祥事に関して、連帯責任は必要性について」を実施した。

処 理：KJ 法によって、内容を検討した。

【結果と考察】

連帯責任の要・不要を質問したところ図 1 のように、必要が 18 件（75%）、不要が 6 件（25%）となった。予想に反し、連帯責任を必要と考える傾向が強いことが示された。自由記述内容を、KJ 法によって分類を行ったところ図 2 のように、きれいなグレーションを示した。連帯責任の問題に対しては、単純に要・不要を判断することができないような内容であることが窺われる。

犯罪に関する抑止力として、Hirschi (1969) の社会的絆理論が参考となる。連帯責任に関して考察する際、この社会的絆理論がある程度の参考となると考えられる。

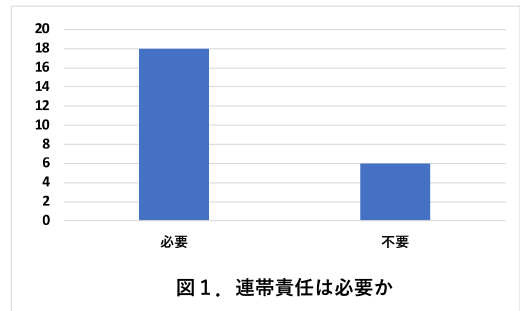


図 2. 連帯責任について、どう思うか（KJ法）

